



TITLE:

小山先生との熱い日々

AUTHOR(S):

久保田, 信

---

CITATION:

久保田, 信. 小山先生との熱い日々. 本覺寺杼貝 2012, 67: 21-22

ISSUE DATE:

2012-09-21

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/191099>

RIGHT:

許諾条件により、墨消しを施している部分があります。

## 小山安生先生との熱い日々

久保田 信

〒649-2211 和歌山県西牟婁郡白浜町 459

京都大学フィールド科学教育研究センター 瀬戸臨海実験所

海南市に所在する和歌山県立自然博物館の委員をやらせて頂いているが、小山安生先生とそこで知り合えた。かねてからお名前は耳にしていたが、博物館での貝類展示などは小山先生の標本が多数使われ、世界の貝類標本も収集されるなど、貝に造形が深く何でも知っておられた。私は幼少の頃から貝好きで（ライフワークのカイヤドリヒドラ類の研究もそれが一役かっている）、瀬戸臨海実験所へ 1992 年 1 月に赴任してからも豊富で多産する貝に目を奪われ、付設の水族館の展示でも初めて見るものも多く、その頃から毎日一回だが見回っている瀬戸臨海実験所“北浜”と番所崎の打上貝類について（生きたのを殺すのは忍びなくなっている）、分類の生き字引的存在の小山先生にそれらの同定の最終確認をお願いできた。それをまとめて発表するまでの先生とかわしたいくつもの書簡のやりとりはもとより、長い電話などが一つ一つ懐かしい。特に先生のやりとりでは、電話は実に長くて楽しかった。先生との共著のその発刊は少々大部の頁となるので、南紀生物誌に 2 部に分けて公表した（2002 年 44 巻）。日本初記録や和歌山県初記録をはじめ和歌山が北限となった種も明記し、4 綱 6 亜綱 21 目 94 科 273 属 524 種・亜種・型の目録を作成できた。ただしこれらは肉眼で同定できる種で、砂粒くらい貝はまだまとめていないので先生に申し訳なく思っている。

そんな中、先生は 1981 年発刊の瀬戸臨海実験所研究報告 (Publications of the Seto Marine Biological Laboratory) の Special Publication Series 第 7 巻の続編として、それから 24 年経過した 2004 年に、その補遺、即ち「Okutani, T. & Matsukuma, A. 2004. Supplement to a catalogue of molluscs of Wakayama Prefecture, The Province of Kii. I Bivalvia, Scaphopoda and Cephalopoda. Publ. Seto Mar. Biol. Lab., Special Publ. Ser. VII. 53 pp., 8 Pls. + I-iii.」の発行に努力された（出版費さえも捻出された）。その当時、日本貝類学会の会長と副会長だった奥谷喬司博士（頭足綱と掘足綱を担当）と松隈明彦博士（二枚貝綱を担当）が著者となって、世界に通じる英文原著論文として公表されたわけである。その結果、和歌山県には上記 3 綱が 927 種も記録されることとなったのである。

小山先生はこれに続いて、「有肺類を発刊したい」と私にしばしばもらしておられたが、それはまだ実現をみておらず、「豊富な腹足類も未完」となったままである。「和歌山県は全国で一番貝類が多種記録されている所である」と先生からよく耳にしていた。是非とも残りの 2 綱についても発刊されるべきだろう。先生のまとめられたその続編の「あとがき」に何人ものお名前が掲載されてあるように、黒潮貝類同好会の方々の活躍はめざましいものがあるので、大いに期待したい。

末筆ながら、小山先生はガンと診断されてもそれに負けずにお元気に和歌山県立自然博物館へ通われ、新しい倉庫に収容された先生の大レクシヨンの整理をされており、たまに私がそこを訪れた時は、あれやこれやといろいろと紹介して下さった日も忘れ難い。また先生と小生との上記以外の共著もいくつかあるが、内之浦で発見されたスダレハマグリの記録が最後となった（2012年発刊予定）。先生のご冥福を心よりお祈り致します。